

志向]である。

3. 2. 「坐」の日本と「立」の西洋

座るということは、ひざのところで折り曲げて、足を折り重ねる動作であるから、重なり志向的である。日本文化では正座という正式な座り方があるが、正に、重なり志向である。

西洋文化は、狩猟社会や牧畜社会をベースに発達した面があるので、極めて「足」が重要である。足がしっかりと活躍するのは、まず「立」の行為の際である。西洋に立食パーティがあったり、西洋の幽霊に足があったり、足の重要性は随所に見られる。立つという行為において、足は曲げるのではないから、重なり志向ではないといえる。また、足と大地は対立する。だから、立つ行為は分かれ志向といえる。少なくとも、立つという行為は、足と大地の融合を暗示しない。つまり、この点でも、重なり志向ではないであろう。

足に関わる行為が、次の段階で、活躍するのは「走る」という場面である。これは、足と地面が離れるので、分かれ志向の行為である。これに対し、「歩く」という行為は、足と地面が離れることはないので、いや、むしろ、足と地面が重なるので重なり志向といえる。

まとめてみると、つぎのようになる。

(17) a. 坐・歩 → 重なり志向

b. 立・走 → 分かれ志向

3. 3. 手と足の対比と志向性

手の平は合わせることができるが、足の裏は合わせるのに苦勞する。一般に文化的行為として、手を合わせる行為はよく見られるが、足を合わせる行為は殆ど存在しない。

例えば、日本文化において、神社での拍手、仏教寺院での合掌は、手を合わせる行為である。手に関わるこれらの行為は重なり志向であるといえる。一方、足は重なり志向的ではないということになる。

日本文化は手の文化といわれるほど、かつてから「手」を重視する側面が多かった。手は農耕社会において欠かせないものであった。手によって田植えをし、手によって収穫するからである。

そのことが影響し、「手」を用いたイディオムが増えたのである。日本文化は手の文化、すなわち、重なり志向の文化といえるのである。

(18) a. 手から始まるもの：手形、手紙、手鏡、手前、手下、手軽、手頃、手相、手品、

手配、手入、手間、手刀、手塩、手玉、手帳、手取、手数・・・

b. 手で終わるもの：上手、下手、切手、勝手、痛手、苦手、得手、大手、相手、

派手、先手、空手、岩手、選手、歌手、投手、捕手、拍手、・・・

c. イディオム：手当たり次第、手玉に取る、手薬煉引く、手古摺る、手際がいい、

手っ取り早い、手を変え品を変え、諸手をあげて、口八丁手八丁・・・

これらを英語にしても、ほとんど hand を用いない。また、日本語は、分かれ志向の足を用いた表現は少ないが、あってもマイナスイメージである。

(19) 足が出る、足がつく、足を洗う、足をすくう、足を奪われる、足を食われる、足を取られる、足を抜く、足の踏み場もない、足手まとい・・・

一方、英語の世界では、足に関わるイディオムはプラスイメージが目立つ。

(20) get one's foot in (the door) : 首尾よく潜り込む、知られ始める、第一歩を進める

have both feet on the ground : 実際的である

have one's feet under one : 自立する、自分の考えを持つ

keep one's feet : 転ばず立っている、成功する

3. 4. 研究と教育と志向性

大学の世界では、研究と教育の2つが重要であるとされる。大学が単なる研究機関ではなく、高等教育機関だからである。

研究は、学問・勉強あるいは学習と同じ線上にある。何かを求めて自分自身を高めるといふ行為には変わりないからである。この行為は、自分の持つ情報や知識に、他の領域の情報や知識を足し算することに過ぎないので、重なり志向性が強いといえよう。

一方、教育は、自分の持つ情報や知識を、自分自身から分けて、相手に与えるのであるから、分かれ志向と規定することができる。

言い換えれば、研究は、これまでの知識に新たな知識を重ね合わせる行為、教育は、これまでの知識を分け与える行為なのである。⁷

日本が中国に、遣隋使・遣唐使を派遣して、新しい文化を学ぶ行為は、重なり志向であるといえ、西洋人がキリスト教を伝えるために、日本に来た宣教師の布教活動は、分かれ志向である。

4. 日本文化における分かれ志向

4. 1. 日本宗教史における「重なり志向・分かれ志向」循環論

これまで、日本文化は重なり志向、西洋文化は分かれ志向であると論じてきたが、日本文化にも分かれ志向がないわけではない。特に日本宗教史の分野で、分かれ志向がいくつか散見される。

日本文化における仏教の受容は、日本の風土と外来宗教の重なりの結果で、蘇我氏の隆盛は日本宗教史上の重なり志向の萌芽を意味する。

しかし、奈良時代においては、種々の宗派が導入され、南都六宗と称された。いくつかの宗教が独立して存在する状況は、宗教史における分かれ志向が現出であるといえる。⁸

さて、平安時代になると、最澄と空海が、仏教の中でもっとも重なり志向的な宗派である密教をもたらして、仏教が神道と重なる現象（神仏習合または神仏混淆と呼ばれる）が起こってきた。⁹

鎌倉時代になると、仏教は庶民のためのものとなり、様々な宗派が確立した。それぞれ個性を主張しているのので、宗教界の分かれ志向が再び起こったことになる。

室町時代になると、七福神信仰が盛んになり、十三仏の信仰が完成する。これは数多くの仏たちの中から、一定数の仏たちを選び出し、まとめるという「重なり志向」の傾向が見える。¹⁰

戦国時代から安土桃山時代にかけて、日本の宗教事情は、様相を変える。というのは、キリスト教の伝播である。キリスト教は、これまで議論したとおり、分かれ志向の宗教なので、この時代は、日本宗教史上は分かれ志向なのである。¹¹

江戸時代には、四国八十八箇所の巡礼が広まった。これは八十八の霊場を一つにまとめた重なり志向の帰結である。また、江戸時代には、仏教の宗派的個性は重要でなく、殆ど全ての寺が葬式に従事し、人口の異動などを管理する市役所的な役割を持つに至るので、仏教という1つのまとまりになった。これは重なり志向といってよい。

結論としていえることは、日本の宗教史は、重なりと分かれが交互に繰り返されているということである。

(21) 日本宗教史と志向性

奈良時代	平安時代	鎌倉時代	室町時代	戦国・安土桃山時代	江戸時代
分かれ	重なり	分かれ	重なり	分かれ	重なり
南都六宗	密教	新仏教	七福神等	キリスト教	八十八箇所

4. 2. 最澄は分かれ志向、空海は重なり志向

平安時代初期の日本仏教界における僧侶の双壁として、最澄と空海が存在するが、この2名は路線が異なる。

最澄は、これまでの宗派や考え方の中で、有益と思われるものを取捨選択し、円・密・禪・戒の4者に纏め上げた。つまり、仏教の各宗派や考え方全体から、重要なものを分けて再構成したので、仏教分類上の基本的発想は分かれ志向であるといえる。特に、当時、政権側が望んでいた奈良仏教界を排除したという点が、自らの仏教が奈良仏教から決別することになるわけで、分かれ志向であることは理解できよう。

一方、空海の実績としては、仏教の各宗派を取り込み、奈良仏教界も自らのシステムに組み込み、仏教だけでなく、道教や儒教、更に、欲望人の考え方まで、取り込んだという点が特筆される。つまり、自らの密教に、他の全ての宗派や考え方を重ね合わせたということから、空海の実想は重なり志向であるといえる。¹²

4. 3. 日本史の転換期と分かれ志向

日本史の転換期には、分かれ志向が優勢となった。これは、日本に限ったことではない。西洋の宗教改革は、従来の宗教との決別、すなわち宗教上の分かれ志向であるといえるし、市民革命は、従来の絶対王政からの決別、すなわち政治上の分かれ志向であると考えこ